

山本 盤男

Interviewer
進研アドBetween編集長
長田雅子

教育重視の姿勢を貫き 意識改革を進めて 地域に信頼される大学へ

8学部20学科。およそ1万1千人の在学生。九州有数の規模を誇る九州産業大学は、いま、改革の季節を迎えている。「教育重視」を掲げて、地域社会からの信頼獲得をめざす山本盤男学長に、改革にかける思いを聞いた。

学生一人ひとりを把握し きめ細かくバックアップ

長田 2010年に学長に就任されて以来、積極的に改革を推進しておられます。特に「教育重視の大学」をテーマに掲げていらっしゃると思いますが、どのような思いがあったからなのでしょう。

山本学長(以下山本) 私の思いを一言で言えば、「信頼の獲得」です。本学は、およそ1万1千人の学生が学ぶ総合大学で、これだけの規模の大学は地方ではめずらしいと思います。しかし、残念なことに、ここ10年ほど志願者数は減少傾向にあります。加えて、除籍・退学者が減らず、就職率は伸び悩んでいます。入り口、出口が共に非常に厳しい状態だったわけです。

本学は、九州・山口エリア、特に地元の福岡県の志願者が多い大学ですから、志願者が減少するという事ではないか。大学の基本的な価値は教育ですから、まずは教育改革を行い、信頼を勝ち取りたいと考えました。

私たちが掲げる「教育重視」の第一歩は、マンモス大学にありがちな「そっけなさ」や「冷たさ」を排除することでした。1年次から全員の出席状況を把握し、クラス担任を中心に各部署が連携して、学生一人ひとりの動きを把握する。そして、きめ細かくバックアップしていく。しつこいくらいの「面倒見のよさ」を特徴の一つとしました。

長田 教育の基盤である教養教育、中でも特徴である基礎教育と英語教育について教えてください。

山本 専門科目を学ぶ前の足固めとして、全学共通の基礎教育科目で基本的な教養を身に付けさせます。基礎教育

センターによる学習支援も行います。

英語教育の特徴は「学部横断型・能力別クラス編成」にあります。全学生を習熟度別に62段階のクラスに分け、本学独自のテキストによるきめ細かな指導を行います。また、英語教育の一環として、成績上位者は海外でのジョブトレーニングを受けられます。グローバルに活躍できる人材を育成したいという考えに基づくものです。

多種多様な産学官連携で 特色あるPBLを展開

長田 「KSUプロジェクト型教育」についてお聞かせください。

山本 これも、「教育重視」の延長にあるものです。教養教育の上に成り立つ新しい学びのスタイルと位置付けています。本学の「強み」「弱み」を客観的に知るため、新入生の保護者や高校生などを対象に、リサーチを実施しました。本学の取り組みが知られていないなど、厳しい評価もあり、正直ショックを受けたのですが、現実を受け止めたうえで、本学への期待が高い、社会で活躍できる力を伸ばす教育をより強く打ち出そうと考えました。そこで注目したのが、以前からいくつかの学部・学科で実施していたPBLでした。

経営学部では、10年ほど前からPBLを組み込んだ授業を展開し、一定の実績を挙げていました。学生が知識を活用して主体的に学ぶ手法にあらためて光を当て、ブラッシュアップして確立した特色ある学びのスタイル。これが、KSUプロジェクト型教育です。

長田 学生はどのように学習を進めていくのですか。

山本 KSUプロジェクト型教育の特

徴は、学生が主体となって進める自由でダイナミックなコラボレーションにあります。学生は、学部や学科、地域や企業との垣根を越え、連携してプロジェクトを進めます。さらには、行政や卒業生なども加わって、さまざまなプロジェクトが動いています。専門分野の異なる人々と一緒に“現場”を体験することによって、教室の中だけでは学ぶことのできない「実践力」「共創力」「統率力」を身に付けていくことがねらいです。

長田 具体的にどのようなプロジェクトが進められているのでしょうか。

山本 それはもう、多種多彩です。おもしろいものでは、経営学部の学生が学内に農場をつくってサツマイモを栽培し、醸造会社と一緒に焼酎を開発するというプロジェクトがあります。他にも、商店街活性化のための企画を実施したり、芸術学部の学生が家具のデザインに関わったりしています。自動車や航空機、医療、ファッション、エネルギー関連まで、実にさまざまな分野の企業や行政とコラボしながら、活発に動いています。フィールドの幅広さは、本学が8学部20学科を有する総合大学ゆえのことだと思います。

長田 改革を進めるにあたって、教職員の協力を得るだけでなく、意識改革も必要だったのではないのでしょうか。

山本 教職員の意識改革なしに大学改革はあり得ません。しかし、率直に言って本学のFD・SDは先進的な大学に比べて遅れているのが実情です。FD委員会はありますが、専門部署の設置が必要だと考えています。前進したことを挙げれば、IRです。同志社大学が中心となって発足した「大学IRコンソーシアム」に参加し、ようやく



やまもと いわお 1948年生まれ。愛知県出身。1978年大阪府立大学大学院経済学研究科博士課程単位修得。九州産業大学商学部助教授、経済学部教授、経済学部長、大学院経済学研究科長を歴任し、2010年に学長就任。専門は財政学。研究テーマは、インドにおける財・サービス税導入と連邦財政システム。博士(経済学)。

学生調査などをスタートさせたところ
です。

人を伸ばす力こそが 信頼される教育力の源泉

長田 今後の課題や新たな取り組みなどについてお聞かせください。

山本 喫緊の課題は、学部・学科の再編です。これについては、2段階で進めることを検討中です。まず、入学定員の確保に苦戦している理工系、芸術系の学科を再編します。次に、文系の4学部に着手することになるでしょう。再編のキーワードはやはり「地域」です。「地域からいかに信頼されるか」をテーマに、社会のニーズを考慮しながら学部・学科を再構築していきたいと思っています。

もう一つの課題は、やはり教育力を高めることです。めざす大学像は、「地域社会から最も信頼される教育力を持った大学」です。学生が満足できる。保護者が安心して任せられる。高校の先生から「あの大学なら大丈夫」と言ってもらえる。そして、卒業生が「九州産業大学に学んでよかった」と心から

思える。そういう教育です。

最も信頼される教育力とは何か。それは「人を伸ばす力」です。学生はみんな、入試難易度だけでは測れない大きな力を秘めています。潜在している力を面倒見のよさによって見だし、確実に伸ばす教育をしていく。そうした教育が信頼につながる。学生一人ひとりの良さを見つけて伸ばす教育ができる大学をつくりたいと思います。

同時に、このような本学の新しい動きを、特に高校の先生に伝えていかなければなりません。メディアについても、従来の紙媒体中心のスタイルではなく、時代に合った新しいものを取り入れていく必要があるでしょう。

長田 例えば、ソーシャルメディアも使って、ということでしょうか。

山本 そのとおりです。ただし、九州は、人と人とのつながりが特に重視される地域ですから、やはりフェイス・トゥ・フェイスのコミュニケーションは欠かせません。そのため、毎年およそ660の高校を訪問しています。こうした地道な活動を基本に、新しいメディアも取り入れながら、本学の魅力を幅広く発信していきたいですね。